東京文化発信プロジェクト

TOKYO PAPER

トーキョーペーパー

for Culture

フォー　カルチャー

気づけば都心に目が向いていた。なにせ私たちの住む街東京は、言わずと知れた日本最大の都市であり、日本の中枢を担っている。そんな都心を、顔のパーツで例えるなら、目や鼻、口元がまず浮かぶ。人はどうしても目立った造形に、注目してしまうものだから。でも、見かたを変えると気づく。造形は、輪郭から生まれることを。顔には輪郭がある。街にも輪郭がある。静かな団地に、のどかな田園風景、そして都心から1,000km離れた場所に暮らす人々。そう、郊外や島々の営みがまた、この街の輪郭を作っている。力強く美しく。

Before we even realize, the heart of the city has drawn our eyes. It goes without saying that this city of Tokyo where we live is the largest metropolis in Japan, and the hub of the nation. If we compare it to a face, the parts that come to mind are the eyes, nose, and mouth, because inevitably, people focus on the shapes that stand out. But if we change our perspective, we begin to notice: those shapes arise from a larger outline. And just as a face has an outline, so does a city. A peaceful rice paddy in a quiet residential district. A community 1,000 kilometers away from the central Tokyo. What happens in the outskirts and on the islands far away creates the outline of this city. Beautifully, and powerfully.

第八号／008

東京の輪郭をなぞって

4,000m級の山々を、日々散策中

ホンマタカシ（写真家）× 小林聡美（女優）× 伊藤千枝（振付家）

研究テーマ⑧：
東北と一緒に考える
ART SUPPORT TOHOKU – TOKYO

東京×島京地図

東京の文化を研究するフリーペーパー

4,000m級の山々を、日々散策中

東京郊外——。
それはすべてが過密な都心とは違う、
東京のもうひとつの顔。
ホンマタカシさん（写真家）、小林聡美さん（女優）、
伊藤千枝さん（振付家）を客員研究員に招き、
今号は武蔵野の面影を残す調布から三鷹へと探訪しました。

The outskirts of Tokyo present another face of the metropolis, where everything is different from its crowded center. For this issue, we invited guest researchers Takashi Homma (photographer), Satomi Kobayashi (actress), and Chie Ito (choreographer) to report from one such district, stretching from Chofu to Mitaka (the old Musashino area).

甲州街道沿いに佇むロイヤルホスト。郊外を映し出すこのファミレスで初対面を果たしたのは、ホンマさんと伊藤さん。一方の小林さんは、それぞれと仕事を通じて出会い、敬愛し合う間柄だった。そんなお三方がひとつのテーブルを囲み、快晴の調布飛行場に寄り道し、最後は国立天文台の敷地内にある、三鷹市星と森と絵本の家へ。大正時代の歴史ある建物と広い庭を傍らに置きながら、座談会は始まりました。

小林聡美（以下小林）：今日はみなさん東京生まれ、東京育ちのシティボーイとシティガールということで。

ホンマタカシ（以下ホンマ）：聡美さんはどちらの出身ですか？

小林：葛飾です。ホンマさんは？

ホンマ：僕はこのすぐ近くの西東京市です。生まれは文京区ですけど、一歳の頃に引っ越してきました。

小林：ホンマさんが引っ越した当時は、西東京市という市名ではなかったですよね。

ホンマ：その当時は保谷市と田無市という2つの市が存在していました。それが合併して、西東京市（2001年）に。

小林：今はもう田無市はないんですね。寂しい！「北新宿」とか、街をまとめてしまうところが、東京のちょっとつまらないところだなって。

伊藤千枝（以下伊藤）：私もそう思います。

ホンマ：例えば霞町も、西麻布ではなく、霞町のままで良かったのに。

小林：街の単位が小さいと、色々面倒だから合併して名前を変えてしまうんですかね。

ホンマ：多分、効率化ですよね。でもそれによって、やっぱり人に説明するときは楽になりました。「どこの出身ですか？」と聞かれて、「田無、保谷周辺です」と言うよりも、西東京市の方が位置も含めて伝わりやすくて。伊藤さんはどちらの出身ですか？

伊藤：生まれも育ちも蒲田です。東京と言ってもだいぶ外れの街に、40歳の頃までずっと住んでいました。

小林：生粋の蒲田っ子。

伊藤：です（笑）。そんな蒲田は今、新しい電車を走らせようとしている計画があって、それが「蒲蒲線（かまかません）」と言うんですよ。

ホンマ：なんだかうどんみたいですね。

伊藤：名前、やっぱり気になりますよね？（笑）。そんな蒲蒲線開通に向けて、街がきれいに整備され始めているんですけど、その光景を見ながら、東京の人はつくづく新しいもの、きれいなものが好きだなって思いました。例え今の暮らしが不便じゃなくても、外側から「こっちの方がいいよ」と推薦されると、それに流されていくようなところを最近よく感じます。

ホンマ：建物の話に限ると、東京の壊しては新しいものを作る性質みたいなものは、多分江戸時代の頃から受け継がれていますよね。江戸っ子は、簡素な木造でできた長屋暮らしでしたけど、それは火事などの災害が起きて家が倒壊してしまったときに、すぐに建て直しができるようにするためで。だから何百年という歴史ある石造りの建物が並ぶヨーロッパとは、感覚が全然違う。

Takashi Homma × Satomi Kobayashi × Chie Ito

客員研究員の証は毎号お馴染みのロゼット！

This rosette shows that they're our guest researchers!

小林：東京は、新陳代謝の激しい街。

ホンマ：だからある意味で東京は当時から世界の最先端だったのかもしれないですね。江戸の街は火事が起きて当たり前だった。だから江戸っ子は基本的に根を張らない。食の定番だった蕎麦屋でも、蕎麦はさっと食べて颯爽と店を後にするのが、江戸っ子の粋な食べ方でしたし。そうやって考えていくと、東京の人は、まるで小さいところを遊牧する遊牧民のような生き方なのかもしれませんよね。

小林：その遊牧民の素質からなのか、私はずっと東京に住みながら、どこか外側からこの街を見ているようなところがいつもありますね。

伊藤：わかります。なんていうか、地方で暮らす方や外国の方がイメージする「東京」のなかには、私はいつもいない気がしています。

ホンマ：だからかえって地方から上京してきた人、例えば前回（※）の曽我部恵一さん（ミュージシャン）は、下北沢にしっかり根を張っている感じがあって。そういうことって、逆に東京の人の方が意外とできないのかもしれない。

ハードボイルド東京

伊藤：公演（珍しいキノコ舞踊団）のための稽古場所として、東京のスタジオを連続で借りられないときは、地方合宿をするんですね。そうすると、環境的には静かだしすごく稽古に没頭できる反面、10日間ぐらいずっとそこにいると、精神的には行き詰まってしまうことがよくあって。きっと普段、いろんな刺激に満ち溢れている東京で作品を作っているから、その環境に自然と心が慣れているのだと思うんです。

小林：私の場合、その刺激がときどき強すぎて、例えば買い物ひとつ行くにしても、どこに行ったらいいかわからなくなるときがあります。

ホンマ：つい最近、ニューヨークから知らない若い写真家が来日して、彼のブログ用にインタビューされたんですけど、そのとき「よくこんなストレスフルな街でセルフマネジメントできているな」って、僕に言うんです。そいつは東京のほかに、1か月かけて九州を旅行していたみたいで「九州はいいよ。だけど東京はビッグニューヨークだ」とも言っていて。

伊藤：私も外国人の友達で、「東京は厳しいね」って言う人が結構います。東京はいろんな刺激に慣れすぎて、飽和状態であるのかもしれない。それが逆に気持ちを内側に籠らせてしまう状況にもなっているのかなとは、思います。

小林：公演するとき、東京に比べて、地方や海外とでは雰囲気は違いますか？

伊藤：その土地ごとにやっぱり温度差はあります。そんななかでも、東京は一番緊張します。お客さんはみんな、日々いろんな刺激に慣れているから、見る目も肥えているし、その分、作品の受け取り方も厳しいですよね。

小林：お芝居や音楽など、ジャンル問わず表現する人たちにとって、やっぱり東京は一番ハードルが高いですよね。

ホンマ：そもそも東京はイベントが多すぎますよね。

小林：確かに多すぎると思う。

ホンマ：僕自身、仕事柄観ないといけないものがあって、それを一つひとつ追いかけて観るのでもう、精一杯。

伊藤：昔は1つの公演や展覧会に対して、本当にわくわくしながら待っていましたね。「あと1週間だ！」とか言いながら。

ホンマ：それが今では「あれっ（会期が）終わってしまう」っていうことがよくある。だからそういう東京で生きていかなければいけないって、かなり大変です。ハードボイルドですよ、東京は。

小林：そういうなかでホンマさんは、いつもどんな気持ちで東京を撮っているんですか？

ホンマ：決してラブだけじゃないですね。でも嫌いだって言うのは簡単ですけど、結局そこの部分も含めて、変わっていく東京を僕はただ撮るしかない、というか。それは欲求なのか宿命なのか自分でもわかんないですけど。

小林：ホンマさんの撮る東京は、なんていうか、決して無邪気な東京は映っていないですよね。

ホンマ：そうですね。だから東京に対する特別な思い入れを撮っている感覚はないんです。それに僕が考える東京みたいなものは、1枚の写真でどうこう言うのではなく、撮り続けることで無意識に見えてくるものなのかなって思いますね。

小林：ホンマさんは海外に住もうとしたことはなかったですか？

ホンマ：過去に何度も住もうと思ったことがあったんですけど、結局行かずにここにいるのは、やっぱり東京を撮りたくなるからで。もしも僕が外国人だったとしても日本、それも東京は絶対に撮りに行くだろうなって思います。

小林：私も若いころは海外にすごく興味があったから、旅先も海外が多かったんですけど、最近は日本の不思議さにもかなり惹かれています。

ホンマ：だからもう海外に住むことは諦めていて、今はこの街で抱えるストレスをどうやってやり過ごしながら暮らしていけるかを考えていて。東京にいると、ある意味4,000m級くらいの山を登っている気分になりますよ。

小林：それって命がけじゃないですか。

ホンマ：そうですよ（笑）。だから山靴履いて、なるべく人と接しないようにしながら、この大都会を山のように移動しています。
小林：（笑）。そういう技も、東京には確かに必要かもしれませんね。

正しい老人力

小林：東京の厳しいところばかり話題になりましたけど、東京の好きなところ、と言えば、あまり名も知られていない郊外の風景は好きですね。文化という視点で東京を捉えてみても、郊外の方がまだいろんな可能性がありそうですよね。楽しめる余白があって。ここ、武蔵野もまさにそう。日本の懐かしい風景が残っていて。
ホンマ：武蔵野はいいですね。武蔵野という、響きが何かいいじゃないですか。
小林：きっと東京オリンピック（1964年）が開催された頃の風景も残っていそう。今後もそれはなくさずにぜひ残して欲しいなって思います。あと郊外ではないですけど、日本橋も好き。今あの界隈には新しいビルがたくさん建てられてきていますけど、昔ながらの風景もちゃんと残っていて。例えば日本橋人形町の甘酒横丁。ああいうのどかで、美味しいものがたくさん食べられる地域に住んでみたいな。
伊藤：蒲田もすごくのどかですよ。特に実家のある地域は、戦後に東北の方たちが出稼ぎに来ていた地域でもあるので、今も訛りがあったりして、独特の地域性があって面白いです。
小林：地元と言えば、葛飾もまたすごくのどか。上野駅から京成線に乗ってときどき実家に帰るんですけど、電車のなかは、昭和の空気が漂っていて、窓からの眺めも昔とあまり変わらない。
伊藤：そうやって考えていくと確かに東京は厳しいけれど、好きな場所もたくさんあります。キノコは劇場に限らず、街のいろんな場所で踊ることがあるんですが、その場所が好きじゃないと絶対踊れないんです。そもそも場所自体が、私たちをウェルカムしてくれている。そしてそこで見てくれる人に対していかに衝撃を与えられるか、見ている景色を変えられるのかを、いつも考えていて。
小林：だから結局、どう街に対峙するかって、自分自身と場所次第ですよね。渋谷のスクランブル交差点や新宿の高層ビル街とか、そういう都心に入っていくと、やっぱり4,000m級の覚悟がいるけれど（笑）、いろんな断面、側面があっての東京だから、面白い。
ホンマ：場所によってはすごく息切れするから、気をつけてください。
伊藤：（笑）。山と言えば、東京にいても富士山の見える場所に行くとうれしくなるんですけど、普段物事を見るときの視点においても、できるだけ遠くの方を見る努力っていうのはしないとなって思います。そうじゃないと、つまんない人生になっちゃう。
ホンマ：じゃあ老眼はいいですね。
伊藤：そうですね。必死に遠くを見るっていう（笑）。自分に合っています。
ホンマ：2050年には人類始まって以来の高齢化社会がやってくるらしいし。これからの時代は、老人力。by赤瀬川さん。
小林：あ、それなら私、順調に老人力が養われています。今や落語や俳句が一番の趣味ですから。落語会とかに行くと、お客さんの年齢が高くて落ち着きますよー。私なんて若者扱いです。
ホンマ：正しい老人力だ。
小林：いろんな意味で、ちょっと切羽詰まった最先端の東京には、老人力が必要。
伊藤：ということで。
ホンマ：これで十分、まとまったよね。

※本紙 vol. 07に曽我部恵一さんが登場。その記事で下北沢のことに触れています。詳細は公式ウェブサイト上のバックナンバーにて。

Everyday walk up a 4,000-meter-high mountain

Takashi Homma: Kobayashi-san, which part of Tokyo are you from?
Satomi Kobayashi: I'm from Katsushika. What about you?
Homma: I'm from Nishitokyo. I was born in the Bunkyo district, but I moved when I was one.
Kobayashi: Back when you moved there it wasn't called Nishitokyo, right?
Homma: Back then there were two cities, Hoya and Tanashi. They merged to become Nishitokyo (in 2001).
Kobayashi: This habit of merging districts is one of Tokyo's more unfortunate traits, I think.
Chie Ito: I think so too.
Kobayashi: A lot of things are inconvenient in small cities so they tend to merge together and change their names, don't they.
Homma: Maybe it has to do with optimization. But when that happens, it becomes easier to explain where a person is from. Nishitokyo is easier to explain, including its location. Ito-san, where are you from?
Ito: I was born and raised in Kamata. It's part of Tokyo but it's outskirt of the city. I lived there until I was 40. There's a plan to build a new rail line in Kamata called the Kamakama Line.
Homma: That sounds like some kind of udon noodle.
Ito: (laughs) The city is starting to get cleaned up in preparation for the opening of the Kamakama Line. As I watch that happen I've been thinking about how much Tokyoites love things that are new and clean. Even if their current life isn't inconvenient.
Kobayashi: Tokyo is a town where the new replaces the old at a furious pace.
Homma: In that sense, Tokyo was on the cutting edge of the world from way back then. Fire was a fact of life in Edo, and for that reason, the people living there basically never put down roots. It's just as if Tokyoites were a nomadic tribe wandering from place to place in their small territory.
Ito: Sometimes, to prepare for performances, I stay in the countryside with other performers. The environment is very quiet and I'm able to completely immerse myself in rehearsal, but after about ten days, I often find myself reaching a dead end psychologically. I think that because I normally create works in Tokyo, which is overflowing with stimuli, I've naturally become accustomed to that environment.
Kobayashi: For me, that stimulation is sometimes too strong. For instance, there are times when I don't even know where I should go to buy a simple item at the store.
Homma: Very recently, a young photographer came from New York to Japan and interviewed me for his blog. He said to me, "It's amazing how well you manage to take care of yourself in this stressful city."
Ito: I also have a fair number of foreign friends who say Tokyo is a tough city.
Homma: In the first place, there are too many events in Tokyo. I have to see certain things for work, and it's all I can do to just keep up with them all.
Kobayashi: Given that context, what feelings do you have when you photograph Tokyo?
Homma: It's definitely not always love. It's easy to say I don't like it, but in the end, I feel like my only option is to keep photographing Tokyo as it changes, that aspect of it included.
Kobayashi: The Tokyo that you photograph certainly isn't an innocent one, is it.
Homma: Yes, that's true. I don't feel like I'm taking photographs that embody any special devotion to Tokyo. Tokyo as I think of it can't be captured with a single photograph. Instead, I come to see it without intention on my part, through the act of continuing to take pictures.
Kobayashi: Did you never think of living abroad?
Homma: I did think of moving abroad a number of times in the past, but ultimately the reason I stayed here is that I wanted to photograph Tokyo.
Kobayashi: When I was young I was also interested in other countries and I often went abroad on holiday. Recently though, I feel drawn to the oddness of Japan.
Homma: I've given up on living abroad and now I think about how I can let the stress of this city pass me by as I continue to live here. Being in Tokyo makes me feel in a certain sense like I am climbing a 4,000-meter-high mountain.
Kobayashi: Your life is on the line then, isn't it!
Homma: I guess that's right (laughs). So I put on my mountain boots and move through this big city like it's a mountain, trying my best not to touch anyone else.
Kobayashi: (laughs.) That may be a skill that's necessary in Tokyo. We've been talking about the hard parts of Tokyo, but if I had to say what I like about Tokyo, it's the less known places on the fringes. Musashino, where we are now, is a perfect example of that. It still retains the nostalgic look of old Japan.
Ito: Kamata is also very peaceful. The area where my family home is located in particular was a place that a lot of people came to from the Tohoku area (the northeastern part of Japan) after the war to do seasonal work, so even today people speak in a dialect. It's an interesting place with a distinct local character.

ホンマタカシ／Takashi Homma

1962年東京生まれ。1999年『東京郊外 TOKYO SUBURBIA』（光琳社出版）で第24回木村伊兵衛写真賞受賞。2011年から2012年にかけて、自身初の美術館での個展「ニュー・ドキュメンタリー」を日本国内三か所の美術館で開催。現在、東京造形大学大学院客員教授を務める。http://betweenthebooks.com

Born in 1962 in Tokyo, Takashi Homma was awarded the 24th Kimura Ihei Photography Award in 1999 for *TOKYO SUBURBIA* (Korinsha Publishers). From 2011 to 2012 his first solo museum exhibit, *New Documentary*, toured three museums in Japan. He is currently a visiting professor at Tokyo Zokei University Graduate School.

伊藤千枝／Chie Ito

1970年東京生まれ。1990年「珍しいキノコ舞踊団」を結成。以降、全作品の演出・振付・構成を担当し、国内外で作品を発表している。振付家としてフィリップ・ドゥクフレ『Iris』の演出アシスタントを務めたほか、CMや映画、テレビなどでの印象的なダンスシーンを手掛けている。http://www.strangekinoko.com

Born in 1970 in Tokyo, Chie Ito founded Strange Kinoko Dance Company. in 1990. Since then she has directed, choreographed, and produced all the company's performances, which have been staged both at home and abroad. In her role as a choreographer she has served as assistant director for Philippe Decouflé's *Iris* and created distinctive dance scenes for a number of films, TV commercials and TV shows.

小林聡美／Satomi Kobayashi

1965年東京生まれ。映画、TVドラマのほか、エッセイ集の出版など多岐にわたり活動。主な出演作に『かもめ食堂』（06）、『めがね』（07）、『ガマの油』『プール』（09）、『マザーウォーター』（10）、『東京オアシス』（11）など。『紙の月』（14）では日本アカデミー賞を始め、数々の映画祭で助演女優賞を受賞。

Born in 1965 in Tokyo, Satomi Kobayashi's work has ranged from films and television dramas to essay collections. Her major film appearances include *Kamome Shokudo* ('06), *Megane* ('07), *Toad's Oil* ('09), *Pool* ('09), *Mother Water* ('10), and *Tokyo Oasis* ('11). She won the Japan Academy Prize for Outstanding Performance by an Actress in a Supporting Role, as well as numerous other awards, for her 2014 appearance in *Pale Moon*.

Kobayashi: Speaking of hometowns, Katsushika is also a very tranquil place. I take the Keisei Line from Ueno Station back to my parents' house sometimes, and the inside of the train has an air of the Showa period to it. The scenery outside the windows hasn't changed either.

Ito: When I think about it that way, Tokyo is a tough place, but there are lots of places I love, too.

Kobayashi: So ultimately, the way we confront the city is determined by ourselves and the place. When you go into the heart of the city to a place like the Shibuya diagonal crossing, you do need to prepare yourself for that 4,000-meter-high mountain (laughs).

Ito: Speaking of mountains, even in Tokyo, going to places where I can see Mt. Fuji makes me happy. When it comes to our perspective on ordinary things as well, I think we need to make an effort to look as far as possible into the distance. If we don't do that, life becomes dull.

Homma: In that sense, oldsightedness must be good for us.

Ito: Yes, that's true. You look desperately into the distance (laughs).

Homma: I've heard that by 2050 we'll have the most aged society since the dawn of humanity. The coming era is all about "Rojinryoku (Elderly Power)" (the phrase coined by Genpei Akasegawa).

Kobayashi: My "Rojinryoku" is developing very nicely. My favorite current pastimes are rakugo (comic storytelling) and haiku poetry. When I go to rakugo performances, I feel so calm because the members of the audience are all elderly. They treat me like a young woman!

Homma: That's the right kind of "Rojinryoku."

Kobayashi: In many ways "Rojinryoku" is essential in this tense, cutting-edge city of Tokyo.

Ito: And with that concluding comment…

Homma: I think we've wrapped this up quite well.

ブンプロ掲示板

研究所の中にある掲示板には、今日も最新情報がずらり。
アートイベントにも注目です!

The research lab bulletin board is already covered with events and programs.
Let's take a look at some upcoming events in the arts!

ブンプロが主催するプロジェクトなどの詳細は、公式ウェブサイトから。
SNSでも旬な話題を提供しています!

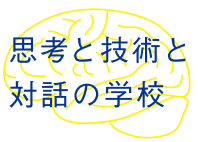
Find out here about programs and details of projects presented by BUNPRO.
Fun topics are also posted on Facebook and Twitter!

www.bh-project.jp
www.bh-project.jp/en

東京文化発信プロジェクト
@tokyobunka

「思考と技術と対話の学校」、1年間の実り

The "Thought, Skill and Dialogue"
– The Year's Results



アートプロジェクトの現場を担う人を育てる、
「思考と技術と対話の学校」の基礎プログラムの初年度が終了!
思考力と対話力を磨きながら、プロジェクトを運営する力をつけることを
目指した本プログラム。1年間を通して見えてきたことを、
坂本有理スクールマネージャー(東京アートポイント計画プログラムオフィサー)に語ってもらいました。

Year one of the basic program of the "Thought, Skill and Dialogue,"
designed for training future leaders of art project sites,
has come to a close! The aim of this program was to foster the
ability to manage projects, while enhancing the skills of thought and dialogue.
The school manager, Yuri Sakamoto (Tokyo Artpoint Project Program Officer),
told about things that became clear over the program of the year.

Official Web Site **tarl.jp**

それぞれの視点をシェア

1年目となる今年度は、20代から50代までの大学生や社会人など、多様なバックグラウンドと異なるスキルや経験を持つ32名が受講。全11回の講座では、毎回様々な分野からゲストを招き、アートプロジェクトの活動や現場の仕事について学ぶとともに、なぜアートプロジェクトを行うのかについて思考と対話を深めながら考えました。
毎回のホームルームの時間には、担任役を担う4名のスクールマネージャーのもと、ゲストの話を振り返ったり、授業を経て気づいたことや疑問点などを話し合ったり、それぞれの経験をもとに意見交換をし合ったりしました。世代もバックグラウンドも、アートプロジェクトの経験値も様々だったので、実に多様な視点での議論がなされ、受講生にとってもそれが刺激的な体験となったようです。

受講生たちの変化

授業は朝から夕方までみっちり。予習も課題もあり、なかなか情報量の多いプログラムでしたが、日を追うごとに受講生のみなさんの情報吸収力が増し、より深い思考や対話がなされる学び合いの場となっていったのが印象的でした。アートプロジェクトの現場に関わっている方は、授業を通して培った視点や考え方を、実際の現場に活かしている様子もありました。また、この授業をきっかけにアートの現場に就職する方、就職を検討される方もいます。
アートプロジェクトの現場は人手不足が課題となっていますが、現場に関わりたいと思う非常に熱心な方が多くいるという事実は今後の希望につながりました。受講生のみなさんと将来的に現場でご一緒できる日を楽しみにしています。

2年目に向けて

1年目は、仕事や現場についてまず知るとともに、アートプロジェクトの概念について学ぶ授業が中心でしたが、2年目はより実践的な技術を学ぶプログラムも実施予定です。今後の予定はウェブサイトをご覧ください。

Sharing Points of View

In this first year, the 32 participants were university students, working people and so on, ranging in age from 20s to 50s, with various backgrounds and differing skills and experiences. Each of the 11 lectures featured invited guests from different fields. Participants learned about the activities and on-site work involved in art projects, and considered reasons for carrying out art projects while deepening their thinking and dialogue.
In each homeroom, under the guidance of the four school managers, participants reflected on guests' lectures, discussed insights and questions that had emerged in the classes, and exchanged opinions based on their own experiences. The differences in participants' ages and degrees of experience in art projects gave rise to discussions from truly diverse perspectives.

How the Participants Changed

The program included both class preparation and assignments, and presented a large volume of information. What was impressive was that it became a place for mutual learning where each day the participants' ability to absorb information improved and their thinking and dialogue deepened. It also seemed that people actually involved in art projects were making use of the perspectives and ways of thinking developed through this program in their work on site. And some people were inspired by this program to work (or consider looking for work) in the art field.
The shortage of personnel on the sites of art projects is becoming a serious issue; and the fact that there are so many really enthusiastic people who would like to take a hands-on role gave me hope for the future.

Looking Towards Year Two

The first year consisted mainly of programs for learning about the concept of art projects. From the second year we will conduct programs teaching practical skills. Please check the website for information on future plans.

『TOKYO PAPER for Culture』のバックナンバー、公開中!

Back issues of "TOKYO PAPER for Culture" are out now!

「東京の文化を知る、深める、高める」をコンセプトに、
2013年から東京文化発信プロジェクトが
年4回のペースで発行している『TOKYO PAPER for Culture』。
バックナンバーを公式ウェブサイト上でご覧いただけます。

"TOKYO PAPER for Culture" is issued four times a year
with the aim of knowing,
deepening and enhancing Tokyo culture.
Back issues can be viewed on the official website.

創刊号
東京の文化を研究する

第二号
祝祭のまち、東京へ。

第三号
東京文化の新しい幕開け

第四号
東京のあかつき

第五号
東京ハレとケ物語

第六号
トーキョースポーティー

第七号
こんにちは、東京ローカル

今年もアートな一夜がやってくる

六本木アートナイト2015

「ハルはアケボノ ひかルつながルさんかすル」

Back for 2015! A whole night dedicated to the arts

Roppongi Art Night 2015

In spring it is the dawn - shining, connecting, joining in

メインプログラム ライゾマティクス
《アートトラックプロジェクト ハル号 アケボノ号》のイメージ
Image of the main program Rhizomatiks《Art Truck Project》

現代アート、デザイン、音楽、映像、パフォーマンスなどの作品が街にあふれ、一夜限りの非日常的な体験をつくり出すオールナイトイベント、六本木アートナイト。6回目となる今年は、「現在の東京」「これからの都市」を考えるうえで欠かせない“テクノロジー”や“メディアアート”の可能性を探るべく、新たに株式会社ライゾマティクス代表取締役の齋藤精一氏をメディアアートディレクターとして招致。前回に続きアーティスティックディレクターを務める日比野克彦氏とタッグを組み、六本木アートナイトの新しい形を生み出していく。また、開催以来初の試みとして、一般の方からプログラムを募集する《オープン・コール・プロジェクト》を実施。作品制作のプロセスなど、本番に向けた様々な取り組みもプレプログラムと称して実施していく予定だ。進化し続けるアートの饗宴をお見逃しなく。

Roppongi Art Night — for one night only, Roppongi will be filled with works from the fields of contemporary art, design, music, video, and performing art, offering extraordinary experiences all through the night. Seiichi Saito, director of Rhizomatiks Co., Ltd., will serve as Media Art Director at this year's event, the sixth of its kind, exploring the possibilities of technology and media art, which are essential to any consideration of Tokyo today and the cities of the future. In addition, Katsuhiko Hibino returns as Artistic Director for the third year running, and the two directors plan to work together to reshape Roppongi Art Night. For the first time in the event's history, members of the public have been invited to submit their own programs for the event, via the "Open Call Project." The actual process of producing the works and various other initiatives ahead of the event itself will also be incorporated in the form of "pre-programs." Don't miss this continually evolving artistic feast for the senses!

会期：平成27（2015）年4月25日（土）10:00～26日（日）18:00 ※コアタイム（メインとなるインスタレーションやイベントが集積する時間帯）は4月25日（土）18:22【日没】～26日（日）4:56【日の出】 **会場**：六本木ヒルズ、森美術館、東京ミッドタウン、サントリー美術館、21_21 DESIGN SIGHT、国立新美術館、六本木商店街、その他六本木地区の協力施設や公共スペース **料金**：入場無料 ※一部のプログラムおよび美術館企画展は有料 **問い合わせ**：03-5777-8600（ハローダイヤル 年中無休8:00～22:00） **主催**：東京都、アーツカウンシル東京・東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）、六本木アートナイト実行委員会【国立新美術館、サントリー美術館、東京ミッドタウン、21_21 DESIGN SIGHT、森美術館、森ビル、六本木商店街振興組合（五十音順）】

Date & Time: 10:00 4.25 (Sat) – 18:00 4.26 (Sun), 2015 *CoreTime (many of the main events take place during this period):18:22 [Sunset] 4.25 (Sat) – 04:56[Sunrise] 4.26 (Sun) **Venues:** Roppongi Hills, Mori Art Museum, Tokyo Midtown, Suntory Museum of Art, 21_21 DESIGN SIGHT, The National Art Center, Tokyo; Roppongi Shopping Streets, and other collaborating facilities and public spaces in the Roppongi area **Admission:** Free (There is a charge for some programs and exhibitions) **Information:** 03-5777-8600 (Hello Dial (in Japanese); available 8:00 – 22:00, 365 days a year) **Organizers:** Tokyo Metropolitan Government, Arts Council Tokyo/Tokyo Culture Creation Project Office (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture), Roppongi Art Night Executive Committee [members (in alphabetical order): Mori Art Museum, MORI Building Co., Ltd., The National Art Center, Tokyo; ROPPONGI Shopping Streets Association, Suntory Museum of Art, Tokyo Midtown, 21_21 DESIGN SIGHT]

親子で楽しむ、海外の舞台芸術

TACT/FESTIVAL 2015

Foreign stage performances that all the family can enjoy

大人も子供も楽しめる舞台公演やパフォーマンスを、海外カンパニーを招いて行うTACT/FESTIVAL（タクトフェスティバル）（国際児童青少年芸術フェスティバル）。6回目を迎える今回は、東京芸術劇場のシアターイースト/ウエストでの舞台公演を中心に、ロワー広場などで行われるイベント、さらに大道芸との連携など盛りだくさん。日本ではなかなか紹介される機会のない上質な作品を、ゴールデンウィークの池袋で体験できる。

The TACT/FESTIVAL (Theatre Arts for Children and Teens Festival) showcases plays and other stage performances by guest performers from overseas that are fun for adults and children alike. This year's event – the sixth of its kind – focuses mainly on stage performances at Tokyo Metropolitan Theatre's Theatre East/West, and also includes events in the Lower Plaza and other places, not to mention an array of collaborations with street performers. This Golden Week holiday, Ikebukuro is the place to go to enjoy outstanding works of a kind that don't normally make it to Japan.

会期：平成27（2015）年5月3日（日）～6日（水・祝） **会場**：東京芸術劇場 シアターイースト／ウエスト、ロワー広場ほか **料金**：右記2公演全席指定（税込）大人2,500円、こども（高校生以下）500円 ※2演目セット券（「眠れない…」＋「アサニシマサ」）大人4,000円（東京芸術劇場ボックスオフィスで前売のみ取扱） **問い合わせ**：0570-010-296（東京芸術劇場ボックスオフィス） **主催**：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）、東京都、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）

Date: 5.3 (Sun) – 5.6 (Wed), 2015 **Venues:** Tokyo Metropolitan Theatre — Theatre East/West, Lower Plaza, others **Admission** (for the two performances right): All seats reserved (prices including tax) Adults ¥2,500, Children (high school students and younger) ¥500 *Set of tickets for both performances (*L'insomnante* & *Asa Nisi Masa*) Adults ¥4,000 (only available from the Tokyo Metropolitan Theatre box office; must be purchased in advance) **Information:** 0570-010-296 (Tokyo Metropolitan Theatre Box Office) **Organizers:** Tokyo Metropolitan Theatre (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture), Tokyo Metropolitan Government, Arts Council Tokyo (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture)

クレール・リュファン「眠れない… L'insomnante（ランソムナント）」

Claire Ruffin: *L'insomnante*

©Vincent Beaume

ステージ上にはベッド、天井には無数の枕……。チェロの音色にいざなわれ、摩訶不思議な「不眠症（insomnia）」の世界が広がっていく。

On the stage, a bed; on the ceiling, a myriad of pillows.... The mellow tones of the cello draw you into the mysterious world of insomnia.

ジョゼ・モンタルヴォ「アサニシマサ ～魔法の呪文（じゅもん）」

José Montalvo: *Asa Nisi Masa*

©Patrick Berger

パリの国立シャイヨー劇場の新作。本物のダンサーと映像の動物が繰り広げる、最先端の技術が駆使されたユーモラスな物語。

The new work from the Théâtre national de Chaillot in Paris. A humorous tale that unfolds through the use of cutting-edge technology, bringing live dancers together with video footage of animals.

東京の島とブンプロと

The Islands of Tokyo and BUNPRO

ブンプロ事業は東京の島しょ部にも広がり、人と人、人と島を繋いできました。その中から、3つのプロジェクトをご紹介します。

BUNPRO's projects have expanded to the islands of Tokyo, connecting people with one another and with the islands. Here are three of those projects.

三原色〔ミハライロ〕

Miharairo

miharairo.to-on.info

平成26年度スタート。大島を支えてきた世代、大島で生まれ育ちこれからを担う世代、大島へ訪れる多様な世代をデザインやアートでつなぎ、活気ある地域づくりを目指す事業です。各方面のプロジェクトに携わる人やクリエーターを招き、ワークショップなどを行っています。活動内容はフリーペーパー『[Paper]ミハライロ』でも発信。

Launched in 2014. Miharairo aims to forge bonds through design and art among people of different generations within and without, and to stimulate dynamic community building. They hold workshops, inviting creators working in a wide range of projects. Their activities are detailed in the free paper "[Paper] Miharairo".

三宅島大学

Miyakejima University

www.miyakejima-university.jp
www.tarl.jp

平成23～25年度に、三宅島を舞台に実施。大学という「しかけ」をつくり、その講座やプログラムを通じて人々が出会い、のびのびと語らう「学び」の場をデザイン。コミュニケーションを生み、島の魅力や地域資源を発掘・発信していくことを試みました。現在、3年間の成果を冊子「三宅島大学誌」としてまとめています。

Held on Miyakejima from 2011 to 2013. They created a university framework and designed a program for learning. The aims were to bring about communication, and to discover the island's attractions and local resources. The results of its three years of activity will be published as a booklet "Miyakejima University Magazine".

東京スープとブランケット紀行

Tokyo, Soup, Blanket and Travelogue

soupblanket.asia

演出家・劇作家の羊屋白玉さんを中心に、平成26年度から展開。生活圏に起こるものごとの「終焉」と「起源」、そして、それらの間を追求する事業です。プログラムの1つ『青ヶ島ブランケット』では、昨秋に日本一人口の少ない村である青ヶ島村を訪れ、リサーチを敢行。その成果を、ブックレットとして発行する予定です。

Launched in 2014 and led by theater director and dramatist Shirotama Hitsujiya. In one of its programs, "Aogashima Blanket", project members visited and conducted research in autumn 2014 on Aogashima, the village with the smallest population in Japan. The results will be published in booklet form.

このほかに、子供から大人まで幅広い人たちがクラシック音楽を身近に楽しめる「プレミアムコンサート～未来へのハーモニー～」や、アーティストの指導のもとに子供たちが舞台作品を作り上げて公演を行う「パフォーマンスキッズ・トーキョー」などの事業も行っています。

We are also carrying out projects such as "Premium Concert: Harmony for the Future," which gives people of all ages and backgrounds the opportunity to enjoy classical music firsthand; and "Performance Kids Tokyo," in which children create and perform stage productions under the guidance of artists.

次のページでは東京の島をクローズアップ！
On the next page, we take a close-up look at the islands of Tokyo!

東京（トーキョー）×島京（トウキョウ）地図

1 大島（通称：伊豆大島） Izu Oshima

人口：8,236人｜面積：91.06㎢｜都心から：120km｜東京で一番大きな島。三原山を中心とした火山島で、国土地理院の地図において、日本で唯一砂漠と表記されている「裏砂漠」がある。

Population: 8,236 | **Area:** 91.06sq. km | **Distance from central Tokyo:** 120km | Tokyo's largest island. A volcanic island with Mt. Mihara at its center, it is home to "Urasabaku," the only place in Japan called a desert on the map of the Geospatial Information Authority of Japan.

2 利島 Toshima

人口：305人｜面積：4.12㎢｜都心から：134km｜断崖絶壁に囲まれているため、定期船が就航してまだ30年ほどしか経っていない。島の緑の約80％が椿で、椿油は主要産業となっている。

Population: 305 | **Area:** 4.12sq. km | **Distance from central Tokyo:** 134km | Because it is encircled by steep cliffs, Toshima has been served by regular passenger ships for about 30 years. Camellias make up about 80% of the island's vegetation, and camellia oil production is one of its principal industries.

6 三宅島 Miyakejima

人口：2,714人｜面積：55.50㎢｜都心から：180km｜飛鳥時代から13回以上の噴火の記録が残り、現在も危険区域では火山ガスマスクの携帯が必要。民謡、太鼓、獅子舞、神事など郷土芸能が多い。

Population: 2,714 | **Area:** 55.50sq. km | **Distance from central Tokyo:** 180km | There have been over 13 volcanic eruptions on the island since the Asuka Period. Even now, people are required to carry gas masks in hazardous areas. Miyakejima has many local performing arts.

8 八丈島 Hachijojima

人口：7,939人｜面積：69.52㎢｜都心から：287km｜ユネスコにより消滅危機言語の「危険」と分類された八丈方言。島内5地域の言葉を併記した「八丈・島ことばかるた」がある。めいららあ＝ごめんください、など。

Population: 7,939 | **Area:** 69.52sq. km | **Distance from central Tokyo:** 287km | The Hachijo dialect has been classified by Unesco as "definitely endangered." "Hachijo, island dialect cards" show the island's five regional dialects side by side. "May I come in?" ("Gomen kudasai" in standard Japanese) is "Mei-ra-ra-a" in Hachijo dialect.

7 御蔵島 Mikurajima

人口：297人｜面積：20.58㎢｜都心から：200km｜野生のイルカが棲みつく島として注目され、観光客も多い。切り立った海食崖があり、学術調査によると、伊豆諸島で最も古い時代にできた島とも。

Population: 297 | **Area:** 20.58sq. km | **Distance from central Tokyo:** 200km | Noted for its wild dolphins, the island is popular with tourists. It has sheer coastal cliffs and, according to scientific surveys, is the oldest of the Izu Islands.

3 新島 Niijima

人口：2,345人｜面積：23.91㎢｜都心から：151km｜1970年代からの離島ブームで観光地化が進んだ東京のリゾート地のひとつ。渋谷駅前のモヤイ像は、新島村から寄贈されたもの。

Population: 2,345 | **Area:** 23.91sq. km | **Distance from central Tokyo:** 151km | This is one of the Tokyo resort areas that became a popular tourist destination with the island boom starting in the 1970s. The well known "moyai" statue in front of Shibuya Station was a gift from Niijima Village.

4 式根島 Shikinejima

人口：543人｜面積：3.92㎢｜都心から：158km｜式根島をはじめ伊豆七島では、水難事故で死亡した者の霊とされる「かんなんぼうし（海難法師）」を避けるため、1月24日は決して外に出てはいけない風習が残る。

Population: 543 | **Area:** 3.92sq. km | **Distance from central Tokyo:** 158km | On Shikinejima and the other "Izu Seven" islands, people still observe the old custom of staying indoors on January 24 to avoid "kannanboshi," said to be the spirits of people who died in accidents at sea.

5 神津島 Kozushima

人口：1,937人｜面積：18.87㎢｜都心から：172km｜伊豆の島々を造った神々の集会所であったという言い伝えから、神が集いし島＝神津島と名付けられた。天上山（572m）では、高山植物も見られる。

Population: 1,937 | **Area:** 18.87sq. km | **Distance from central Tokyo:** 172km | The name Kozushima ("god haven island") comes from the legend that the island was the gathering place of the gods who created the Izu Islands. Alpine plants grow on Mt. Tenjo (572m).

世界有数の大都市、東京。しかし、ふと思いを巡らせれば、
はるか数百〜千km以上離れた場所にあるこの島々も、東京の一部です。
離島経済新聞編集長の鯨本あつこさんを客員研究員に迎え、
都会ではない、東京のもう一つの顔を持つ島しょ部に
スポットを当てながら、島から東京について考えてみました。

Tokyo—one of the world's great cities. When you think about it,
these islands hundreds and even a thousand of kilometers
away are part of Tokyo, too. With guest researcher Atsuko Isamoto,
editor of Rito Keizai Shimbun newspaper,
we thought about Tokyo from the islands, spotlighting not the big city,
but this island group that is another aspect of Tokyo.

鯨本あつこ
Atsuko Isamoto

編集者、企画プロデューサー。NPO法人離島経済新聞社代表理事。株式会社リトルコミュニティラボ代表取締役。『離島経済新聞』『季刊リトケイ』編集長。2011年、東京の有人島をすべて巡る。沖縄と東京を拠点に活動。

Editor, project producer. Representative director of the Archipelago News "Japan" NPO, nicknamed "Ritokei." President of Little Community Labo. Editor-in-chief of *Rito Keizai Shimbun* and *Kikan Ritokei* (Rito Keizai Quarterly Magazine). In 2011, visited all of Tokyo's inhabited islands. Based in Okinawa and Tokyo.

島からコミュニティを考える

都民が暮らす11島を含め、330もの島がある、東京。都内から飛行機で約30分、8,000人以上が生活する大島（通称：伊豆大島）や、面積が4㎢弱ほどの小さな式根島、船で1日以上かかり、亜熱帯に属する小笠原諸島などが太平洋上に点在しています。ひとつの島の上で、地形、気候、風土、歴史、文化、生態系など様々な要素が重なり合い、その島だけの色や柄模様＝島柄ができあがっているのです。余談ですが、これまで私が離島経済新聞やほかの媒体などで離島を入れた日本地図を作ろうとしたとき、本州から約1,800 km離れた最東端の南鳥島までを含めた正確な縮尺の地図を作れたことがありません。スペースの都合上、収まりきらなかったんです。それほどまでに、東京都は広いということなんですね。

島——。鹿児島の奄美大島の島人たちは島という言葉を「アイランド」の意味ではなく、「集落」「縄張り」の意味で使っています。都会であれば、商店街や町内会などひとつの通りごとに「島」があるイメージで、その土地の縄張りや勢力範囲を表す意味で、島という言葉を使います。

東京の離島を巡りながら私が面白いと思ったのは、島で生活している方々が、本州の東京のことを「国」と呼んでいることです。島の人にとっては、東京都民であるというよりも、住んでいる島にアイデンティティの拠り所がある。そのような感覚は、同じ東京都民でも都会に暮らす人たちにはないものではないでしょうか。

また、ひとつのコミュニティの形成において、どのくらいの人数が最適な規模なのかを考えるとき、小規模の良さを論じる研究者が世界に多くいます。最適とされる下限人口を決めることは難しいと言われますが、数百人〜数千人単位の離島コミュニティは、最適なモデルのひとつであると考えられているのです。

11 | 母島
Hahajima

人口：459人｜面積：20.21㎢｜都心から：1,032km｜5〜6代前から入植された島。有人島としては都心から最も遠く、都心から同じく約1,000kmというと北海道や種子島に相当する距離。マンゴーなど農業も盛ん。

Population: 459 | **Area:** 20.21sq. km | **Distance from central Tokyo:** 1,032km | Hahajima has been settled for the past 5 or 6 generations. It is the inhabited island farthest from central Tokyo—at 1,000 km away, it's as far as Hokkaido or Tanegashima. Farming, including mango production, is an important industry.

10 | 父島
Chichijima

人口：2,090人｜面積：23.80㎢｜都心から：984km｜ポリネシアやハワイからの入植者も多く、ミクロネシア地域から伝わった南洋踊りが残る。返還前は英語圏だった場所。東京都で唯一の世界遺産。

Population: 2,090 | **Area:** 23.80sq. km | **Distance from central Tokyo:** 984km | Many people from Polynesia and Hawai'i settled here, and dances brought from Micronesia are performed to this day. Before its return to Japan, it was part of the English-speaking world. The Ogasawara Islands are the only World Heritage Site in the Tokyo Metropolitan Area.

Chichijima

750km
Hokkaido | Yamaguchi

1,000km
Hokkaido | Kagoshima

9 | 青ヶ島
Aogashima

人口：168人｜面積：5.98㎢｜都心から：358km｜海岸沿いは高さ50〜200mにもなる海食崖。人を寄せ付けない厳しさがあることから別名「鬼ヶ島」とも。日本国内で最も人口の少ない村でもある。

Population: 168 | **Area:** 5.98sq. km | **Distance from central Tokyo:** 358km | With a coastline made up of sea cliffs 50 to 200 meters high, the island is also called "Onigashima" (Island of Ogres) for its ruggedness and inaccessibility. It has the smallest population of any municipality in Japan.

Aogashima

※各島のデータは、平成27（2015）年1月末現在の各自治体の情報を参考にしています。
＊Information about each island is based on the data (as of end of January 2015) provided by each municipal body.

※掲載の地図は資料を元にしたイメージです。厳密な実際の距離・縮尺とは異なるところがあります。
＊The map shown here is an image based on informational materials. Distances and scaling are not always exact.

※東京都島しょ部で実施しているブンプロ事業に関しては、P.007をご覧ください。
＊For information about BUNPRO projects held on the islands of Tokyo, please see P. 007.

The Islands of Tokyo

　その一例が利島です。東京といっても離島では過疎化が課題になることもありますが、利島は若手の移住者が活躍しやすい場づくりに力を入れていて、戦後からずっと300人前後の人口をキープし、漁業や椿産業で島を活性化しています。また、人口200人未満の青ヶ島には共同の冷凍庫などがあり、船の着岸率が低い過酷な環境下でも食べ物をシェアして助け合うことが当たり前となっています。都心では社会のシステムに順応して暮らしていくことが求められますが、離島では自然と共にどう生きていくかを大切にしているんです。「足るを知る」。これは、東京の離島で耳にした、島の方の言葉です。最低限何があれば生きていけるのか、何を減らすことができるのか。東日本大震災および東京電力福島第1原子力発電所の事故以降、都会に住む多くの人たちも考えてきたこの問いを、改めて見つめ直すにふさわしい場所が、島なのかもしれません。

Considering Community from an Island Perspective

Tokyo has 330 islands, including the 11 inhabited by Tokyo residents. These islands dotting the Pacific include Izu Oshima, 30 minutes by plane from central Tokyo and home to over 8,000 people; tiny Shikine-jima, less than 4 sq. km in area; and the subtropical Ogasawara island group, over a day away by ship. Factors like topography, climate, natural features, history, culture and ecosystem combine to create the unique color and pattern of each island. Incidentally, when we've tried to make a map of Japan (for Ritokei or other publications) that includes distant islands, we've never been able to make an accurately scaled map extending to the easternmost Minamitorishima, 1,800 km from Honshu. There isn't enough space. That's how huge the Tokyo area is.

　"Shima" means island, but the people of Amamioshima, Kagoshima, use "shima" to mean "settlement" or "territory." They use it to talk about the local territory or sphere of influence—in the same way that a big city street like a shopping street or neighborhood association could be compared to an "island."

As I traveled around Tokyo's outlying islands, it struck me as interesting that the residents referred to Tokyo on Honshu as "kuni" - "country, state." The island where they lived made up a bigger part of their identity than the fact of being Tokyoites. I don't think urban people have a comparable feeling, even though they're Tokyo residents, too.

In considering the ideal population within the framework of a community, many researchers around the world talk about the benefits of smallness. It's said that it's hard to determine an ideal minimum population, but these island communities of several hundred to several thousand people are considered an optimum model.

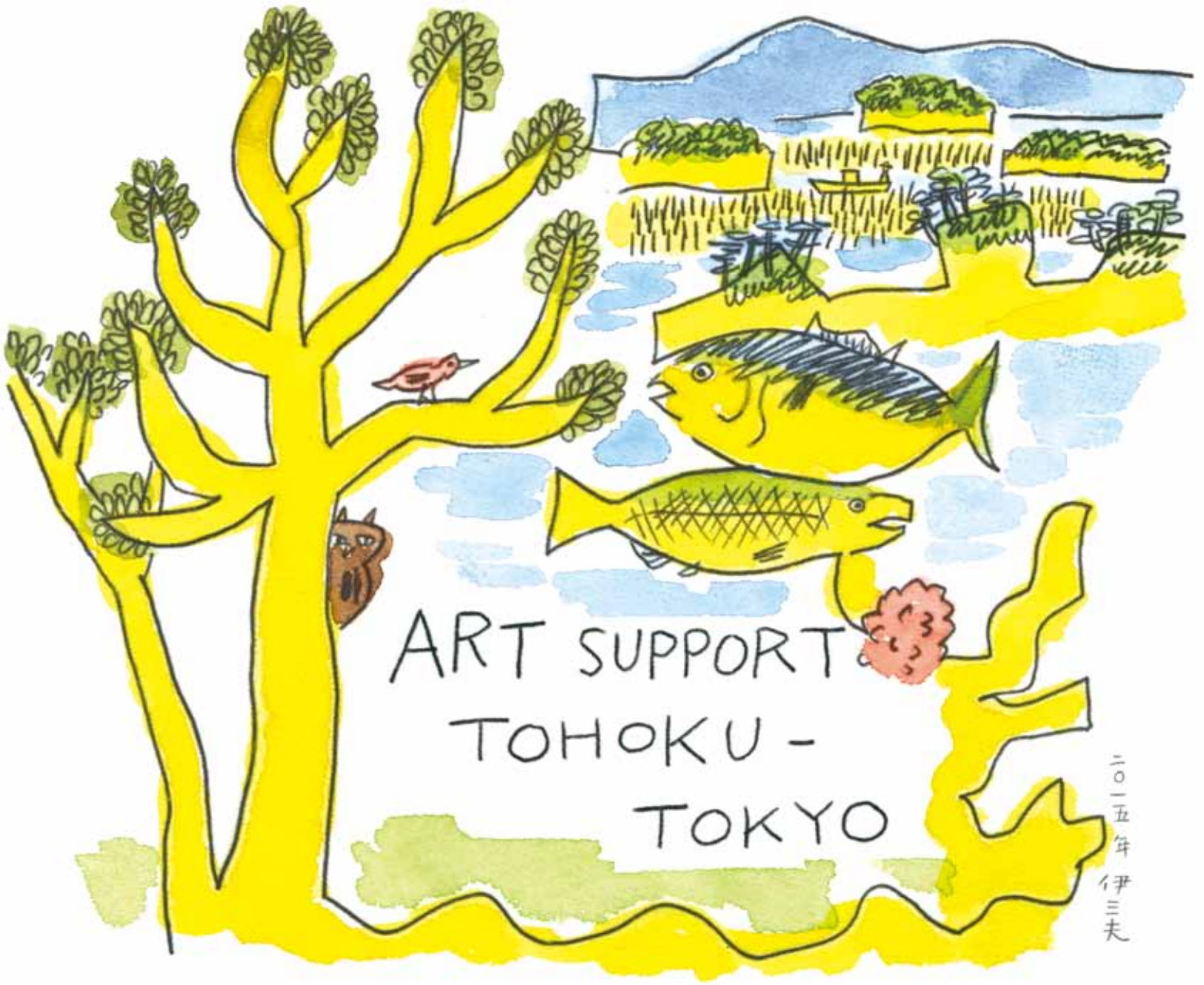
A notable example is Toshima. With depopulation an important issue on outlying islands (even though they're part of Tokyo), Toshima has focused on creating an environment where young newcomers can thrive. The island has maintained a population of about 300 since the postwar period, and revitalized itself through the fishing and camellia-growing industries. Aogashima, an island with a population of under 200, has cooperative facilities like freezers. Even in the island's difficult circumstances, with ships docking infrequently, people share food and help one another as a matter of course. In the big city, people are expected to adapt their lifestyle to the social system; but on outlying islands, people place importance on finding the ideal way to live with nature.

"Be happy with what you have" is a phrase I heard from people living on Tokyo's outlying islands. What is the minimum we need to live, and what can we reduce? Since the earthquake and nuclear power plant accident of March 2011, people in the city have been considering these questions as well; and islands may be best places to reexamine them.

研究テーマ⑧東北と一緒に考える

東日本大震災が起こったあの日から、4年。
それぞれに抱えたあの日があり、始まった物語がある。
言葉はそこに実態が伴ってこそ、初めて意味を持つものだけれど、
今回私たち研究員（編集部）は、東京都とブンプロ共催による被災地支援事業
『ART SUPPORT TOHOKU – TOKYO』を通じて、
アートという言葉の有り様を、その可能性を掴みにいったように思う。
そもそもアートの語源とは、ラテン語のアルス“ars”。
それは“術、才能”などを指している。

It's been four years since the Great East Japan Earthquake.
We all have a connection with that fateful day, a series of events that began the development of an important story.
For a word to mean something, it needs to reflect a truth.
Through ART SUPPORT TOHOKU - TOKYO, a disaster-area relief project co-organized by the Tokyo Metropolitan Government and BUNPRO, we researchers (editors) embarked on a journey to determine what "art" — in its meaning and its possibilities — represents.
The word "art" evolved from "ars," a Latin word that means "skill" or "talent."



「震災は文化に対する緊急事態でもありました。現地に警察や消防隊が派遣されるように、私たちは文化の救援のため派遣されている。そういう意識でした」。

こう語るのは、ブンプロ事業である東京アートポイント計画・プログラムオフィサーの佐藤李青（りせい）さん。アートプロジェクトの企画運営、人材育成プログラムを手がけてきた佐藤さんは、ここで培ってきた知恵や技術を被災地で活かすべく、現在『ART SUPPORT TOHOKU – TOKYO』（以下ASTT）も担当している。

「現地のNPOやコーディネーターと連携し、被災地域の多様な文化環境の復興活動に携わることが、ASTTの目的です。そのためにまず現地に入り、誰がパートナーとなれるのか、今何が必要なのか？という視点からプログラムを立てていきます。また、プログラム自体も大事ですが、被災地域で継続的にプログラムを企画、実行できる運営体制が生まれ、そういう活動に取り組める人材が育っていくことの方がASTTでは重要なんです」。

例えば仮設住宅のなかに人が集える場を作ったり、津波で道具が流されてしまった地域の伝統芸能を支援したり。ASTTの立ち上げ当時（2011年）は、現地で緊急時に必要とされることに焦点を当てて活動することになった。

「いわゆる美術館の展示作品だけがアートとは限らない。現地の人たちとコミュニケーションを取りながら場を作っていくこともまた、アートだと捉えています」。

復旧活動が進行していくと、求められるプログラムも変化していき、それに呼応するように多様な人材も現れてきた。ASTTの活動は今年で4年目に入った。

「生きるための選択肢を増やす。ASTTがそのきっかけになれたらうれしいです」。

“The disaster was a crisis of culture, too. Just as government officials dispatched police and firefighters to rescue people and provide assistance, we went out to rescue culture — that's what our mindset was all about," says Risei Sato, who serves as a program officer for BUNPRO's Tokyo Artpoint Project and currently manages the ART SUPPORT TOHOKU - TOKYO ("ASTT") initiative. "The goal of ASTT is to team up with local NPOs and coordinators in rehabilitating the diverse cultural environment of the disaster area. For us, the most important things are creating operating structures capable of planning art programs on an ongoing basis, and nurturing the kinds of human resources that can make those activities happen."

ASTT creates places where people can gather inside temporary housing areas, for example, and works to support traditional local arts which lost their instruments in the tsunami. When the organization was just starting out in 2011, ASTT focused on providing things that people in the area needed in emergencies. "There's more to art than just exhibits on display in museums," Sato says. "Communicating with local residents and working together to create spaces are part of the artistic sphere, too."As reconstruction progressed, the types of programs that people were looking for started to diversify and draw many different types of people in. "Giving people more choices to live with — that's the kind of effect I hope ASTT can have."

2014.12.20: MIYAGI

海からの視点で地域を愛す

ASTTの主役に会いたい。私たち研究員は現地を巡ることにした。初日は宮城県・塩竈市へ。日本三景として有名な松

島湾の奥に位置する塩竈は、海上貿易の要所として栄えてきた街だ。

「船上から松島湾に面する地域を見ると、同じ湾の兄弟として繋がって見えた。それは陸上では感じることのなかった初めての感覚でした」。

塩竈に生まれ、多賀城市在住。広告制作会社に勤務している津川登昭（のりあき）さんは、震災直後に牡蠣漁師の友人の船から眺めた景色によってスイッチが入った。

「調べてみると、この湾全域が縄文時代に日本で最初に塩を作った文化圏でした。それを知った僕は“湾に生きる”という誇りを、海からの視点でカタチにしていきたいと思いました」。

こうして津川さんは一般社団法人チガノウラカゼコミュニティを発足。その活動のひとつとして、湾の文化を再発見して表現するプロジェクト『つながる湾プロジェクト』（以下『つながる湾』）を運営している。

「自分は有限、地域は無限。自分が伝え遺したいと思うものを無限のものに透過させることで、安心して死ぬことができる。震災を機に、死について考えることは、とても大切なことになりました」。

もうひとり、『つながる湾』には欠かせない人物がいる。アートスペース「ビルドスペース」を運営しながら、国内外のアーティストらとの創造的な場を生みだすプロジェクト「ビルド・フルーガス」を主宰する高田彩さんだ。

「アーティストとギャラリーの関係を、作品の売買だけで完結させるのは違和感がありました。そうではなく、広く社会のなかでのアートの役割を考えたときに、地域のコミュニティを作る人材として、アーティストを活かせるのではと。そう思うと色んな可能性が見えてきました」。

取材に訪れた日はちょうど、アーティストの増田拓史さんが企画、『つながる湾』運営によるイベント、『浦戸食堂 まりこさんのカレーとその記憶』（以下『浦戸食堂』）の開催日だった。私たちは津川さんと高田さん、イベント参加者らとともに開催場所である浦戸諸島・寒風沢島（さぶさわじま）へ。「今、被災地には対話を生み出す作業が大事だなって。そうやってその時々の人や場所に合わせた負荷をかけないと、始まらないものがあると思うんです」。

道中、ぽつりと言った高田さんが印象的だった。

『浦戸食堂』では、津波によって店が流されて以降、食べることが叶わなくなった店主・長南（ちょうなん）まりこさんによる特製カレーが振る舞われた。島人みんなに愛されたカレーを中心に、対話が生まれる。

「ああこの味だわ。ちょっとピリ辛で、癖になるのよね。美味しいでしょう？」。

懐かしそうにその味を噛み締める島の女性。そのとき、高田さんの言う「対話」の意味を改めて思った。

Day 20: MIYAGI

Loving the community from the sea's perspective

We want to meet the people leading the ASTT effort, so we decide to make our way around the area. Our first day takes us to Shiogama, a city in Miyagi. Located in the deep reaches of Matsushima Bay, one of the renowned “Three Views of Japan,” Shiogama developed as a hub for maritime trade. “When I looked up from the boat and saw the area overlooking Matsushima Bay, I could see the familial connections among the communities that reside in the area.” Noriaki Tsugawa, born in Shiogama and now a resident of Tagajo, works at an advertising firm. The scenes he saw from his friend's boat in the immediate aftermath of the disaster sparked something inside him. “I started digging and found out that, all the way back in the Jomon period, Matsushima Bay was the first cultural area in Japan to produce salt,” he explains. “I wanted to take the pride that I felt ‘living in the bay’ and turn it into something visible that captured love for the community from the sea's perspective.”

That inspiration led Tsugawa to create the Chiganoura Kaze Community (General Incorporated Association). One of the organization's projects is the “Tsunagaru Wan Project” (“Tsunagaru Wan”), which aims to rediscover and find expressive outlets for the culture of the bay. “I can only do so much by myself, but the community has infinite potential. If I can put the things that I want to leave behind into a permanent, infinite context, I can die happy. The disaster has made me think hard about death, and embracing that mindset been a revelatory experience.”

There's another person who plays an integral role in the Tsunagaru Wan Project: Aya Takada, who runs the BIRDO SPACE art gallery and supervises BIRDO FLUGAS — a project that gives shape to creative spaces through collaborative relationships with artists from Japan and abroad. “Selling artwork can't be the only link between artists and galleries. That idea just doesn't sit with me well,” Takada says. “When I started thinking about the role that art plays in society as a whole, I knew that I could do something to help make artists valuable resources for their local communities.”

The day we go to interview Noriaki Tsugawa and Aya Takada just happens to be the day of the “Urato Shokudo: Memories of Mariko's Curry” event, a gathering that artist Hirofumi Masuda organized through Tsunagaru Wan. We set off for the event site on Sabusawajima Island, one of the Urato Islands. “What the disaster area really needs right now are projects that spark dialogue,” Takada says quietly as we make our way to the island. “Sometimes, I think, you have to put the onus on people — a little pressure that suits the situation — to start something.” These words uttered by her in a halting way still remain. The Urato Shokudo project has brought an old favorite back to life. For the first time since the tsunami wiped out Mariko Chonan's shop, the project has served her trademark curry that means so much to so many. “This is it, this is it” A woman from the island enjoys the curry and rice, her face relaxing in fond remembrance: strains of what Aya Takada was referring to when she talked about “dialogue.”

1.
『つながる湾』の全体のビジョン担当は津川さん（右）。高田さん（左）はそのビジョンのもと、湾に暮らす人々の可能性を引き出すことをモットーにプログラムを運営。

Noriaki Tsugawa (R) and Aya Takada (L), the two organizers behind Tsunagaru Wan.

2.
塩竈港（マリンゲート塩釜）から寒風沢島まで、船で約46分。浦戸諸島最大の島で、約230人が暮らしている。

Sabusawajima Island is a 46-minute boat ride from Shiogama Port (Marine Gate Shiogama).

3.
増田さんは家庭料理から、個々人の出自や地域性を再発見し伝える「食堂プロジェクト」を行っている。『浦戸食堂』もその一部。

Urato Shokudo is a part of Hirofumi Masuda's “Shokudo Project.”

4.
寒風沢島出身のまりこさん（中央）。島を活気づけようと実家の用品店を一部改装して喫茶店を営んでいた。

Mariko Chonan (middle), born on Sabusawajima Island, partially renovated her family's supply shop into a cafe.

5.
塩竈市は古くから港と鹽竈（しおがま）神社を中心に活気づいていた。駅周辺商店街には、古い建物がところどころ見られる。

Old buildings can be seen here and there along the shopping streets around Honshiogama Station.

1.
宝来館の正面、根浜海岸の松林に建立された「津波記憶石」。祈りの慰霊碑として、人々に寄り添う。

People often come to pay their respects at the tsunami memorial stone that stands among the pines on the Nebama Coast, right in front of the Horaikan.

2014.12.21: IWATE

世界の故郷にきっとなる

高台にある城山中央公民館の駐車場からは、大槌町の中心地が一望できる。かつてそこから見えた景色は、大槌の人の営みだった。けれど今はもう跡形も無い。見渡す限り、盛土工事に覆われている。

@リアスNPOサポートセンターの事務局長として、震災前から釜石・大槌のまちづくりに取り組んでいた川原康信さんは4年前、すべてを失った街を目の前に「『自分たちがやりたいこと』から『自分たちのやれること』に基準を変えよう」と決意した。

以来、川原さんは仮設住宅住民の見回り、見守りなどの活動をしながら、アートによる支援プログラムを実施してきた。

「住民のみなさんは決して笑える状況ではないのに、プログラムを通じて自然と笑顔がこぼれている。たとえそれがわずかな時間でも、やって良かったと。その繰り返しでなんとかやってきた気がします」。

そんな川原さんが、地域の復興を担う人材育成のための塾、ひょっこりひょうたん塾の事務局長として連携した人物が、元持幸子さんだ。もともと国際協力の活動をしていた元持さんが20年ぶりに故郷・大槌に戻ったのは、震災がきっかけだった。

「地域の資源を失った私たちは、外からのサポートによって元気づけられ、地域の文化や新たな価値観に触れる機会を与えてもらいました。でもその価値観をここに暮らす人たちがどう受け止め、活かしていけるのか。担い手の力をつけていかないと、本当の復興はないなって。ひょっこりひょうたん塾とは、その力を養うための人材育成の場でもあります」。

「人材」。元持さんのこの言葉にぴったりな人物に、私たちは会うことができた。釜石の老舗旅館宝来館の女将、岩崎昭子さんだ。根浜海岸沿いに立つ宝来館は、震災時、津波によって2階まで浸水した。

「例えばスマトラ沖地震に遭ったモルディブの人たちは、海から身を守ることを一所懸命考えていた私たちに、海と共存するという視点を与えてくれました。こんな風に震災前には考えられなかった様々な出会いがあり、未来を見るようになったんです。だからこの街は、世界中の人たちと共有できる故郷になっていくのだと思います。だからこそ宝来館も続けなくては」。

そう言いながら見せる岩崎さんの笑顔が、きっとそのままこの街の生きる知恵になっている。そう確信した。

Kamaishi and Otsuchi, IWATE

2.
釜石の希望の場所で、復興の拠点『みんなの家・かだって』の前で、川原さん（右）と元持さん（左）。

Yasunobu Kawahara (R) and Sachiko Motomochi (L) stand in front of “Minna no Ie - Kadatte.”

3.
大槌湾に浮かぶ蓬莱島（ほうらいじま）。著名な人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルと言われ、塾のシンボルでもある。

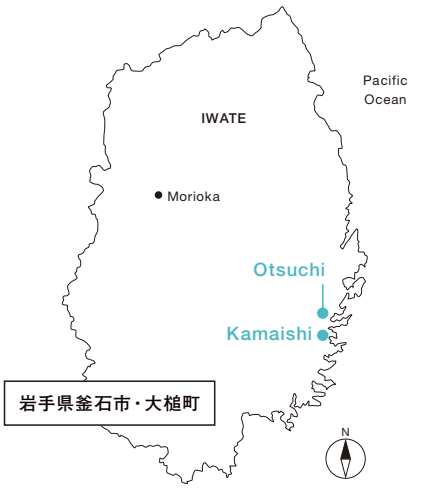
Horaijima Island, the model for the popular puppet show “Hyokkori Hyotan Jima” and a symbol for the School.

4.
海岸から直線距離約300 m。津波は、高さ6.5メートルの防潮堤を乗り越えて旧大槌町役場を襲った。

The tsunami cleared a 6.5-m sea wall and ravaged the old Otsuchi town office.

5.
2014年末に新館をオープンさせた宝来館を前に、女将の岩崎さん。様々な宿泊プランのもと全日営業中。

Akiko Iwasaki poses in front of the Horaikan, which is now open on a full-time basis and offers a variety of accommodation plans.



Day 21: IWATE

This will be a home for the world

We can see the heart of Otsuchi from the parking lot at the Shiroyama Central Community Center. The view used to be of a busy town, with people toiling away at their various occupations. Now, there’s just nothing.

Yasunobu Kawahara is the director of the @Rias NPO Support Center, where he had been organizing community-building activities for Kamaishi and Otsuchi before the earthquake and tsunami struck. Four years ago, when he laid eyes on the vestiges of the places he knew so well, Kawahara made an important change. “I decided to shift from thinking about ‘what we want to do’ to ‘what we *can* do.’”

Since then, Kawahara has been visiting the people living in temporary housing, working to keep residents safe and secure, and organizing art-driven support programs “Considering what these people have been through, you can’t expect them to smile — but their faces light up during the programs. You can see the joy, even if it’s just for a few moments,” Kawahara says. “It makes it all worthwhile. That’s what’s fueled us this whole time.”

A valuable ally for Kawahara is Sachiko Motomochi. The director of the Hyokkori Hyotan School, a place for training human resources to rebuild communities, Motomochi said goodbye to her career in international cooperation and returned to her hometown of Otsuchi for the first time in two decades to help revive the area in the wake of the disaster. “We have lost our local resources, and help from outside the community came and lifted our spirits. It gave us the chance to experience cultures we hadn’t seen before and encounter new sets of values,” Motomochi says. “But how are local residents taking to those new values — can they incorporate them into their lives? Unless we give them what they need to be leaders, our recovery efforts won’t be able to go as far as they need to. The Hyokkori Hyotan School is a place for cultivating those skills and developing capable human resources.”

We were lucky enough to meet someone who personified Motomochi’s ideal “human resources” perfectly: Akiko Iwasaki, the proprietress of the storied Horaikan Ryokan in Kamaishi. The 2011 tsunami flooded the first two floors of the Horaikan, which stands on the Nebama Coast.

“We’ve devoted so much energy to protecting ourselves from the ocean,” Iwasaki says, “but that’s not the only perspective you can have. The Sumatra earthquake years back devastated the Maldives — but they operate on a different philosophy. People there focus on coexisting with the sea. I’ve been fortunate enough to meet people who’ve opened my eyes to things that never would’ve crossed my mind before the disaster hit. I’m much more future-oriented now. I think that this town here can be a home for the whole world to share. That’s why I have to keep the Horaikan going.”

Iwasaki smiles as she speaks, radiating the kind of happy, confident warmth that life in this community depends on.

Day 23: FUKUSHIMA

Art is the only way to win the battle

Our next destination is Yamatogawa Shuzoten — a brewery that dates back

to 1790, making it one of the oldest of the old establishments in the historic brewing town of Kitakata. Waiting for us at the Yamatogawa building, a cherished centerpiece of cultural activity in the area, are Takahisa Abe and Megumi Kobayashi.

“Given the concerns about the nuclear power plant, our focus is still people’s livelihoods — making sure that everyone can get by all right,” Abe explains. “We’ve just started bringing art into the picture little by little, exploring ways that we might be able to use it to help solve problems.”

Abe belongs to an NPO called Wunder Ground, which bases its activities in Iwaki, and also manages Fukushima Art Project x ASTT programs in various areas. “I just don’t think we’ll ever be able to raise any questions or get any answers unless we keep this thing going. That’s why I want our projects to involve as many kinds of people as possible.”

Kobayashi echoes Abe’s sentiments. “Exactly,” she says, “Cultural projects don’t generate tangible results right away, after all.” A curator at the Fukushima Museum, Kobayashi coordinates prefecture-wide programs. She concentrates on building art programs around distinctive regional features that make the content more persuasive and compelling in those specific settings. “As far as Aizu is concerned, I think the activities in the community can help revitalize Fukushima as a whole. We just need to keep the people in Hamadori, where the tsunami hit hardest, and the people in Nakadori, where the radiation problems are most severe, in our hearts and turn that compassion into determination,” Kobayashi says. “Through our programs, I think the people in Aizu will start to appreciate the culture that they’ve always taken for granted, too. That must be a deep, powerful drive to vitalize the community.” The Aizu area, which has benefited for generations from a bountiful forest culture, is attempting to weave together a new culture through the “Mori no Hakobune Art Project” — an effort rooted in the concept of “encountering, eating, and thinking about the forest.”

“The way I see it, art is the only way for Fukushima to win its battles in the aftermath of the disaster. The earthquake and the tsunami showed us just how powerful nature can be. How can nature and people coexist, then? How are people supposed to confront the complicated gaps and challenges that the nuclear accident has generated? Art can create opportunities for finding answers to those questions.”

What is art, then? Over the last three days, I think we’ve learned that art is the “art” — the “skill” — of living.

4.
大和川酒蔵北方風土館では、『森のはこ舟アートプロジェクト』の一環として、日本画家・金子富之さんの作品展示が行われていた。

Mori no Hakobune Art Project co-organized an exhibition of Japanese artist Tomiyuki Kaneko’s works at the Yamatogawa Sake Brewing Museum.

1.
『森のはこ舟アートプロジェクト』西会津エリアのコーディネーターを務める矢部佳宏さん（右から2番目）と、そのご家族と仲間。

Yoshihiro Yabe (second from right), the coordinator of the Mori no Hakobune Art Project in the Nishiaizu area.

2.
廃校になった中学校の木造校舎が2004年、『西会津国際芸術村』として蘇る。矢部さんはここの運営も行う。

Yabe bases his operations at Nishiaizu International Art Village, a formerly closed junior high school.


1


2


3


4


5

3.
西会津国際芸術村は芸術を通した国際交流や都市と地方を結ぶ交流拠点として国内外の人々に親しまれている。

Nishiaizu International Art Village cultivates international exchange through art and serves as a link between urban and rural communities.

5.
「良きパートナーです」と互いを讃える小林さん（右）と阿部さん（左）。大和川酒蔵北方風土館内の一室にて。

Megumi Kobayashi (R) and Takahisa Abe (L) call each other “great partners.”

Kitakata and Nishiaizu, FUKUSHIMA

2014.12.23: FUKUSHIMA

戦う術は、アートしかない

冬晴れの東京よりもずっとあたたかく感じるのは、きっとこの雪のおかげだ。

蔵のまち、喜多方のなかでも老舗の寛政2年創業の大和川酒造へ。街の文化活動拠点としても多くの人に親しまれている酒蔵で私たちを待っていてくれたのは、阿部峻久（たかひさ）さんと小林めぐみさんだ。

「原発のこともありますし、まだまだ活動の主体は生活そのものにあります。そこに少しずつ、アートの視点で何が解決していけるのか？ということを取り入れている状況です。だから『こういう事例でこの問題が解決しました』と、はっきりと言えるものはまだなくて、これからですね」。

そう語る阿部さんは、いわきを中心に活動するNPO法人Wunder groundに所属しながら、各地域で行われる福島藝術計画×ASTTのプログラムのマネージメントを主に担当している。

「そもそもこれはずっと継続していくことでしか、問いも答えも生まれないと思うんです。だからこそ色んな人が関わる事業になっていって欲しいんです」。

そんな阿部さんの言葉を受けて、小林さんもまた「本当にそう。文化事業はすぐに結果は出てこないもの」と重ねた。

福島県立博物館で学芸員を務めている小林さんは、県全域で行われているプログラムのコーディネイトを担当。地域の特性を考え、その土地だからこその説得力が生まれるプログラムづくりに力を注いでいる。

「会津に関して言えば、津波に襲われた浜通り、放射能汚染に苦しむ中通りに想いを寄せながら、会津地方の営みから福島を立て直せることがあると思っています。同時に会津の人は、プログラムを通して当たり前に思っていた文化の価値に気づく。それは土地の力になっていくはずです」。

豊かな森林文化に恵まれてきた会津地方では、“森にふれる、森を食する、森を考える”をコンセプトとした『森のはこ舟アートプロジェクト』を通じて、新しい文化を編み直す試みをしている。

「福島が、震災後に起きた状況と戦っていく術は、アートしかないと思っています。地震と津波は、自然の力を認識させました。自然と人はどう共に生きていけるか？原発事故で生じた複雑な分断と課題にどう向き合っていくか？その答えを生み出す場をアートは作れると思うんです」。

アートとは何か？ それは生きる術だと、この3日間の取材を通して教わったように思う。東北の人々の誇らしき生き様に、敬意を込めて。

東北とわたし

Tohoku and me

東日本大震災の被災地で創作活動を行う、3人の表現者たち。最後に彼らの視点を通して、東北の生きる術を垣間みる。

Meet three artists working to drive creation in the wake of the Great East Japan Earthquake.
Look at things from their perspective to catch a glimpse of the "art of living" in Tohoku.

五十嵐靖晃／Yasuaki Igarashi

アーティスト／Artist

『つながる湾プロジェクト』の参加作家として、「そらあみ-浦戸諸島-」を始め、@リアスNPOサポートセンター運営のもと、「そらあみ-釜石-」を行う。

Igarashi organizes the *Sora-Ami Urato Islands* project and, with the @Rias NPO Support Center, runs the *Sora-Ami Kamaishi*.

海を見つめる東北の視線に感じた未来

『そらあみ』という、参加者と共に空に向かって漁網を編むことで、人をつなぎ、記憶をつなぎ、完成した網の目を通して土地の風景を捉え直すプロジェクトを釜石では仮設住宅（2012年2月）、塩竈では浦戸諸島（2013年8月）、松島では瑞巌寺の参道と雄島（2014年8月）と、それぞれ現地に約1か月滞在し行った。

その際、震災にまつわるいろんな話を聞いた。手を握っていた父親が目の前で濁流に飲み込まれていった話。マネキンのように横たわる遺体を越えて歩いた話。暗闇から聞こえる声を無視できず、屋根から降りて刺すような冷たさの海水に腰まで浸かって助けた話。会社の金庫やロッカーの財布が盗まれていた話。炊き出しの配給を待てず、たくさんの大人が横から手を伸ばした話等々。当時は生と死が隣り合わせで、人の美しさも醜さもそこにはあり、価値観や常識が瞬間的にリセットされた。なかには、あの数日間は不謹慎ながら、みな人間らしくてよかったという声もあった。

今、東北にはそれらを乗り越えた人たちが、未来に継ぐべきものを改めて考え直しながら生きている。海に多くを奪われてもなお、その恩恵を賜り、海を見つめ生きようとする彼らの姿に進むべき未来を感じる。

Each *Sora-Ami* project brings participants together to weave a fishing net into the sky, forging bonds among people, linking memories, and reimagining the character of the land through the mesh of the completed net. The project has created nets in many different locations of the disaster area. For each one, I spent about a month on-site weaving nets with participants.

Over the course of the projects, I got the chance to hear a lot about what happened during the disaster. The muddy surge of the tsunami pulling your father away as you try desperately to keep hold of his hand. Climbing down from your roof and plunging waist-deep into cold, biting seawater to save lives, unable to shut out the voices crying out from the darkness. Full-grown adults scrambling for food, fed up with waiting for emergency rice provisions to come in. People were caught in the limbo between life and death; with that haunting uncertainty a constant presence, the disaster revealed humanity's capacity for both compassion and cruelty. Looking back on those first few days in the aftermath of the disaster, some people appreciate how purely *human* everyone's behavior was — warts and all.

Now, the survivors of those tragedies are taking a fresh look at what they need to preserve and sustain into the future. When I see them trying to live in harmony with the sea, to reap the blessings of something that has robbed them of so much, I get a sense of the future that we need to pursue.

profile／その土地の日常に入り込み、新たな視点と人のつながりを見いだすプロジェクトを手がける。太宰府天満宮で『くすかき』、瀬戸内国際芸術祭2013で『そらあみ』などを行う。

きむらとしろうじんじん／Kimura Toshiro Jin-jin

アーティスト／Artist

2011年12月より大槌町と釜石市にて開催場所探しの散歩会・現地協力者募集の説明会・ミーティングを重ね、12年秋より継続的に『〈お抹茶・陶芸屋台〉野点』を実施。

Since the autumn of 2012, Jin-jin has been holding "Omatcha/Pottery Cart Nodate" events in the Otsuchi and Kamaishi.

語るよりも、行きたいのです

大槌のこと・釜石のことを語るのはむずかしいです。「被災地」「地元の方々」なんて観念的で・大きな名前は使いたくないし、具体的で・小さな名前をひとつだけ取り出して語りたくもない。何かの象徴のように受け取られてしまうのが怖い。 めちゃめちゃ大切な一つの話であって、何かの一例ではない。たくさんお世話になって、具体的な作業をいろんな方と一緒にすればするほど、現地の様々な状況を少しずつでも知れば知るほど、どんどん説明しづらくなっていきます。そして「それでいいのだ」と言い聞かせながら、この3年間お世話になり続けています。

どんどん「説明しづらくなりたくて」僕は大槌や釜石に行っているのでしょう。 ほんま、どこまでいっても自分の都合です。そして、具体的な名前はどんどん増えていきます。 ○○屋の磯ラーメンのたまらん味とか、○○さんのお茶碗の絵付けの海の青色とか、○○商店街で会った腕相撲好きの高校生とか、保育園の○○先生、一緒に作業した○○さんや○○さん、来てくれたお客さん達それぞれの様子とお茶碗……続けたいです。作業を持って、また大槌や釜石に行きたい。とてもとても魅力的な町です。

It's hard to talk about Otsuchi and Kamaishi. I don't want to toss around conceptual turns of phrase like "disaster area" and "local residents" or put things into big, expansive categories. I don't want to focus on a specific, isolated case that only captures a little piece of the story, either. I don't want people to see the story as symbolic of an idea — each story is really, really important in its own right, and it's not fair to make them into examples of something else. The more people I meet, the more I do real work with others, and the more I learn about what's going on in Otsuchi and Kamaishi, the harder it gets to explain everything. But that's OK. That's what I've been telling myself for the three years I've been going there.

I probably keep going to Otsuchi and Kamaishi because I *want* it to get harder to put into words. No matter what I do, it's seriously always for my own convenience. And every time I go, I learn a few more specific names: that incredible iso ramen at the So-and-so Restaurant, the sea-blue tint of the paint on the cups that Mr. So-and-so makes, the arm-wrestling high schooler I met when I was at the So-and-so shopping district, Ms. So-and-so from the nursery school, Mr. So-and-so, who worked with me, and all the customers and cups I've had the pleasure to see. I want to keep that going. I want to take my work to Otsuchi and Kamaishi again. They're the kinds of places that just keep calling you back.

profile／1995年、「路上で・公園で・軒下で・駅前で、その町の・その土地の風景を眺めながら、お客さんが絵付けしたお茶碗をその場で焼いて、お抹茶も飲んでいただく野点」をスタート。現在に至る。

EAT＆ART TARO

アーティスト／Artist

『森のはこ舟アートプロジェクト2014』に参加。間方地区で暮らす人々と共に山村の食文化、トチ餅作りを紙芝居として残し、山間集落の歴史を紡ぐ。

TARO works with residents to create picture-story shows that capture one of their local food cultures.

レシピにならない料理

奥会津にある三島町の間方（まがた）という小さな集落でトチ餅作りを見せてもらっています。

材料のトチの実を食べるにはアク抜きが必要です。大変な作業で、最近は食べる地域も少ないようですが間方は雪が多い山間部で田んぼも少なく、トチ餅はよく作られていたそうです。

さて、地元の人によると9月に収穫した実が餅になるのは1月頃。そんなに時間がかかるのか？ 地元の人に「この作業はどういう意味が？ 省略できないか？」と急かしてしまいました。ネットで検索するともっと簡単そうなトチ餅の工程も出てくるからです。しかし地元の人いわく「わからないけど、昔からこうしているから。失敗すると食べるものがなくなっちゃうし怖くて変えられない」と。

僕はレシピを追い求めていました。レシピは簡潔で分かりやすいことが大切ですが、間方ではトチ餅はレシピになっていない。長い間受け継がれ工夫を重ねた、命を繋いでいくための文化だと気付きました。つまりレシピを追い求めるのではなくて、間方の文化を見せてもらわなくてはならない。出来上がったトチ餅には魔法がかかっていました。固くならずに悪くもなりにくい。なぜそうなるのか？検証するのは野暮な気がしてしまいました。

I got the opportunity to see how people make tochi-mochi in Magata, a small community in Mishima, Okuaizu. To prepare tochi seeds for eating, you have to cook them to get rid of the bitter taste. The task of preparing the seeds is so demanding that there are few places left in Japan where people still eat tochi-mochi as part of their diet. In the snowy, mountainous region surrounding Magata, though, the scarcity of rice fields has laid a strong foundation for the tochi-mochi tradition.

The people in the community told me that the seeds they gather in September eventually turn into mochi around January. Does it really take that long? I was doubtful. I prodded the residents, asking if there was something special about the work involved, though, they told me that they couldn't risk changing their ways: "This is the way we've always done it," they said. "If we don't do it right, we won't have anything to eat."

I was hunting down the recipe, something that was simple and easy to make. However, I soon learned that Magata doesn't have one for tochi-mochi. I gradually realized that they had inherited and tweaked their tochi-mochi tradition for generations, creating a culture that was integral to their survival. Instead of looking for a recipe, I had to open my eyes to the culture of the community. When I ate the tochi-mochi, there was something magical about it; it managed to stay soft and chewy without going bad. How do they do it? I get the sense that trying to figure out might not be an exercise of good taste.

profile／調理師学校卒業後、飲食店勤務やケータリングを経て、食をテーマに制作を行う。おごることしかできない店『おごりカフェ』など多数作品を発表。瀬戸内国際芸術祭などにも参加。

Comic

Tokyo lives outside the movie theater / sigo_kun

① I spend most of my time shut in my room drawing pictures and manga (AKA doing my job) ② Even drawing with both hands I can't speed up… ③ *scritch*

④ As soon as I'm done with work I'm headed out on the town
⑤ Pew!

⑥ On the street, I ignore the beautiful women and their temptations… ⑦ Want to buy a dolphin picture? ⑧ This survey will only take five minutes!

⑨ …and give myself to a different world at a movie theater.
⑩ A moment of pure bliss…

⑪ Tokyo's a trendy city, teeming with movie theaters. You can see all types of flicks, new and old, blockbusters and indie, masterpieces and curiosities, in the city. ⑫ Blockbusters ⑬ Cinema Complexes ⑭ Minor and Indie ⑮ Mini Theaters ⑯ Classics ⑰ Revival Houses ⑱ I'm so happy I was born in Tokyo! ⑲ Weren't you born in Aichi?

⑳ Tokyo's Revival Houses also introduced me to the dazzling Japanese films from the 70s. ㉑ "Tokyo is a sea of neon." ㉒ *Girl Boss Guerilla* (1972) ㉓ Miki Sugimoto is cool~

㉔ That being said, recently a number of famous theaters have been closing, which is pretty depressing.
㉕ I would have gone more often if I'd known it'd come to this!

㉖ You can't assume they'll always be there. Parents and movie theaters both. ㉗ Japanese films today just don't offer enough of that kind of bold, proud nudity.

㉘ As long as I have the money and time, I plan on heading to the theater.
㉙ Right, I'll head to a second film. Right now there's…

㉚ As a side note, why do they always recommend the seats in the back when you're getting your ticket?
㉛ You can see better from the back.
㉜ The first row, please.
㉝ Always sits in the front.

死後くん
sigo_kun

イラストレーター/マンガ家
雑誌『POPEYE』の巻末マンガ、NHK『おやすみ日本』眠いい昔話コーナー、mmm『ほーひ』のジャケットなど様々な媒体で活躍。マンガ『I My モコちゃん』玄光社より発売中。

Results

研究成果／今号を振り返った研究員より

凡人が重ねるところに、射抜くような言葉を使うのが詩人や歌人だ。穂村さんはテレパシーも使えるに違いない。(森隆)／東京を高山に例えたホンマさん。確かにここは息切れすることが多い。でも闇夜に射し込む光が山の稜線を縁取るときは、居て良かったと思う。(水島)／「都会」と「地方」。先入観や記号に捉われるとこぼれ落ちてしまうものも多い。今回の特集を通して、肌感覚を信じて行動することが大事だと改めて思いました。(漆原)／郊外での撮影。過密な都心部では感じられなかった、人や場所との距離感。その微妙な余白の差に郊外を感じました。(中道)／島の多様性を“島柄”と例えた鯨本さん。東京は、みなさんからどんな柄に見えるでしょうか?(石井)／風や雪の向こうに現れる美しい東北の風景、そこに暮らす人たちの強くて優しい目が心に残りました。(藤田)

Poets and lyricists are capable of finding a succinct, to-the-point expression where the common man has to spend a lot of words. There's no question about it – Mr. Homura is also telepathic. (Mori Ryu) / Mr. Homma compares Tokyo to a towering mountain, and it certainly does steal your breath away. But when the light shines through the darkness, framing the ridgeline…I'm always thankful that I can be there. (Mizushima) / When you get caught up in biases and concepts—like "urban" and "rural"—you often miss the important things. Working on this story gave me a renewed sense of how important it is to act on what we feel in our bones. (Urushihara) / Shooting in the outskirts of Tokyo, you get a sense of the distance between people and places that you can't feel in the crowded city center. It's only a subtle difference, but those spaces gave me a distinct feeling of being in the suburbs. (Nakamichi) /Ms. Isamoto used the phrase "island patterns" to describe the islands' diversity. What sort of pattern do you think Tokyo looks like? (Ishii) / The beautiful landscapes of Tohoku unfolded beyond the wind and snows, and the friendliness and strength that I saw in the eyes of the people who live there still remain in my heart. (Fujita)

About Tokyo Culture Creation Project

東京文化発信プロジェクトとは

東京文化発信プロジェクトは、「世界的な文化創造都市・東京」の実現に向けて、東京都と東京都歴史文化財団が、芸術文化団体やアートNPO等と協力して実施している事業です。多くの人々が文化に主体的に関わる環境を整えるとともに、フェスティバルをはじめ多彩なプログラムを通じて、新たな東京文化を創造し、世界に発信していきます。

www.bh-project.jp

Tokyo Culture Creation Project, organized by the Tokyo Metropolitan Government and the Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture in cooperation with arts organizations and NPOs, aims to establish Tokyo as a city of global cultural creativity. The project facilitates involvement of a larger number of people in creation of new culture as well as it creates and globally disseminates new Tokyo culture through organizing international festivals and other diverse events.

www.bh-project.jp/en

公益財団法人東京都歴史文化財団 東京文化発信プロジェクト室
〒130-0026 東京都墨田区両国3-19-5 シュタム両国5階
tel：03-5638-8805｜fax：03-5638-8811

Column

Where the master does his work

あのひとの現場

堤 康彦の教育現場

Yasuhiko Tsutsumi Brings Arts to Kids

堤 康彦／Yasuhiko Tsutsumi

東京ガス株式会社勤務後、大阪府立大型児童館などの勤務を経て、2000年にアーティストによる小学校などでのワークショップ型授業『ASIAS』の活動をスタート。翌年、NPO法人芸術家と子どもたちを設立。
www.children-art.net

会社員時代、高層ビル内のホールやギャラリーで行うダンスや音楽の舞台公演、現代美術の展覧会などを企画していました。その時に思ったのは「ここに集うのは、元々アートが好きな人ばかり」ということ。そこで、まだアートに対する先入観が何もない子供とアーティストが出会ったら面白そうだと思い、あらゆる環境の子供がアートと触れられるように、小中学校や保育園、幼稚園にアーティストが出張して行うワークショップ『ASIAS（エイジアス）』の活動をスタートさせました。現在は『ASIAS』以外にも、閉校した豊島区の中学校をアートファクトリーにした『にしすがも創造舎』を事務所として使いながら、地域の親子に向けたワークショップなども行っています。事務作業もここで行っていますが、固定された場所で何かをやるより、様々な子供のいる場所にどんどん出かけて行く方が性に合っていますね。子供のいる学校や園が、私にとっての現場といえるかもしれません。

我々は普段の子供の様子を知りませんが、ワークショップ後は先生からよく「あの子が今日、こんな反応をしていて驚いた」という話をいただきます。しかし、コミュニケーション能力や自己表現力、あるいはお互いの多様性を認め合う力といったポテンシャルを引き出すには1〜2日の短期プログラムでは足りません。そこで2008年からブンプロ事業の一環として、約10日間のワークショップで発表公演までを行う『パフォーマンスキッズ・トーキョー』*を開始。子供の変化をより強く感じられるだけでなく、先生やアーティストも得るものの多い濃密な時間になっています。大人社会のしわ寄せから、様々な弊害を受けているようにも見える現代の子供たち。それをアートですぐに解決できるわけではありませんが、ワークショップでの体験が少しでも良い方向に行くきっかけになったらと思います。

Back when I worked in the business world, one of my jobs was to plan contemporary art exhibits and dance and music performances held in downtown skyscrapers. It struck me at that time that the only people who attended these events were those who already liked arts. Wouldn't it be interesting instead to bring artists together with children, who don't yet have preconceptions about arts? I decided to start a workshop program called ASIAS that sends artists out to nursery, elementary, and junior high schools, with the aim of giving children in all sorts of environments the opportunity to encounter arts. Today, in addition to ASIAS, I also run workshops and other events for families out of a former Tokyo junior high school that we turned into the Nishi-Sugamo Arts Factory. Even though our activities and offices are based there, however, I prefer to go out into the community as much as possible. You could say that the site of my work is wherever kids are, whether it's a school. Teachers often tell us how surprised they are by the reaction of this or that child to our workshops. Still, a day or two is not enough to fully draw out children's potential for communication, self-expression, and respect for mutual diversity. With that in mind, I launched Performance Kids Tokyo in 2008 as part of the BUNPRO project. These ten-day workshops culminating in performances are not only transformative for the children; they also offer a richly rewarding experience for teachers and artists. Arts cannot provide an instant remedy for the many ills the adult world foists upon today's children. My hope, however, is that our workshops will serve as catalysts for children to begin moving in positive directions.

＊平成27（2015）年3月29日（日）に赤坂区民センターにて、『パフォーマンスキッズ・トーキョー』のホール公演『ちん・とん・しゃん・ペペン！〜落語とラクラクおどりましょ〜』を開催予定。

Tokyo Creative / Hiroshi Homura

Column

トーキョークリエイティブ

文：穂村 弘

Hiroshi Homura

歌人。1962年北海道生まれ。1990年に歌集『シンジケート』（沖積舎）でデビュー。短歌だけでなく、エッセイ、評論、絵本など多方面で活躍中。近著は絵本『まばたき』（岩崎書店／絵・酒井駒子）。

或る雑誌のこと

先日、「子供之友・東京ノ地震ト火事」という古い雑誌を買った。大正十二年十月一日発行、つまり関東大震災の直後に刊行されている。

ギンザドホリ　ガ
ヤケテシマツタ
アノリツパナ　ギンザ　ガ
ハツ　ト　オモフマニ
ヤケテシマツタ
ヤケテシマツタ
ギンザ　ハ
タカイオウチ　ノ
オハカ　ダ
カベヤ
マドヤ
デンシンバシラ　ノ
オハカ　ダ

焼け跡を描いたイラストレーションに、こんな言葉が添えられている。

後記によると、いったん印刷した十月号がすべて焼けてしまったため、すぐに再編集に取りかかり、新しく「東京ノ地震ト火事」号として作り替えたとのこと。

「コレハ　子供之友カラ　皆サンヘ　コンドノ東京ノ　ヂシン　ト火事ノ　アリサマヲ　オ知ラセスル　オテガミノ代リデス。ソノツモリデ　ゴラン下サイマセ」と記されている。

同年同月は、多くの雑誌が欠号となっている。生き延びるたけで大変な時に、よく作り直して刊行できたものだ。後記には「ドンナニカ苦心シマシタラウ」のひとことが見られる。

通常号の半分の頁数に二色刷という突貫工事だが、その中に編集部と作家の思いがこもっているのを感じる。何よりも印象的なのは、惨状を伝える言葉にひりひりするようなポエジーがあり、火事の炎やぼろぼろの銀座の町並みやぎゅうぎゅう詰めの汽車を描いたイラストレーションが作品として美しいことだ。担当した画家は、若き日の村山知義と武井武雄である。

『子供之友 東京ノ地震ト火事』（婦人之友社刊）

“On a certain magazine”

The other day, I picked up an old magazine called *Kodomo no Tomo/Tokyo no Jishin to Kaji (Children's Companion/Tokyo Earthquake and Fire)*. The issue date was October 1, 1923, that is, right after the Great Kanto Earthquake.
Beneath a drawing of a building ruined by fire, I found these words:

Ginza Street
burned down
That magnificent place,
burned down
in an instant.
Burned down,
Ginza is
a grave
for tall houses
A grave of
walls,
windows,
and telephone poles

The editor's note states that because the October edition had been completely burned up, the magazine had been re-edited and released as the *Tokyo Earthquake and Fire* edition.
Taking the place of a letter, *this is a message from those of us at "Children's Companion" announcing the current state of Tokyo's earthquake and fire. Please read this edition with that in mind*.
In that month of that year, many magazines are missing editions. In a time where it was a struggle just to stay alive, I was moved by how well the magazine remade and brought out an issue. In the editor's note, there's one line: *Just how hard has it been for us*.
It's a rushed job – about half the number of pages as a standard issue and printed in two colors – but it's stuffed full with the editors' and authors' feelings. The strongest impression comes from the poignancy of the words describing the tragedy, and the beautiful sense of artistry borne from the illustrations of the fires, packed trains and ragged streets of Ginza. As it turns out, the illustrators were Tomoyoshi Murayama and Takeo Takei in their youth.

『TOKYO PAPER for Culture』vol.008　東京の輪郭をなぞって

発行人：森隆一郎 / ブンプロ｜編集ディレクション・執筆：水島七恵｜編集部：浅野五月、キムキョンナ / ブンプロ｜編集・執筆：平林理奈（P6〜P7）、石井美智子（P8〜P9、P16）/ Playce｜執筆：仲野聡子（P16）
アートディレクション：漆原悠一 / tento｜デザイン：中道陽平 / tento｜写真：森栄喜（表紙、P2〜P5）、藤田慎一郎（P11〜P13）｜ヘアメイク：北一騎（表紙、P2〜P5 小林聡美、伊藤千枝）/ Permanent｜スタイリング：藤谷のりこ（表紙、P2〜P5 小林聡美）
絵：死後くん（P6、P15）、大川久志（P7〜P9）、牧野伊三夫（P10、P14）、オオクボリュウ（P16）｜撮影協力：三鷹市星と森と絵本の家、三鷹フィルムコミッション（共に表紙、P3、P4）／調布飛行場管理事務所（P2〜P3）／ロイヤルホスト 味の素スタジアム店（P5）
衣装協力（小林聡美）：nOOKANDCRANNY（nookSTORE）、ENSORCIVET（株式会社 インコントロ）、糸衣／R.U.（haus & terrasse）｜ロゼット制作：WHYTROPHY
翻訳：オフィス宮崎｜印刷：太陽印刷工業株式会社｜発行：東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）｜発行日：平成27（2015）年3月16日｜禁・無断転載